

<報告・記録>

留学生・教師・地域住民をつなぐ日本語教材とは

—— 主体的な日本語の獲得と関係性の編み直しに着目して ——

金 丸 巧

人間科学部国際交流学科
kanemaru@toua-u.ac.jp

《要 旨》

本稿は、来日間もない留学生の日本語活動のために作成した日本語教材の内容と、その教材を用いた実践「『地域の魅力発信ポスター』を作ろう」の報告である。本報告を通して、留学生、教師、地域住民のつながりを生み出す日本語教材のあり方を考えた。

実践を分析した結果、学生自身が学びをデザインできる余地を残した工夫や、留学生と教師の関係性の変化を生み出す工夫が、留学生の主体的な日本語の獲得を支えていたことが分かった。また、留学生と教師の関係性の変化を生み出す工夫は、留学生の日本語の獲得だけでなく、教師自身が「教える」－「教えられる」という固定的な関わり方を解体する上でも意味を持っていた。そして、学習者の主体的なことばの獲得と使用は、地域住民との関わりにおいてもそれまでの一方的な関係性を解体し、編み直し、新たな関係性を構築するという意味での「つながり」を生み出していたことが分かった。

キーワード：日本語教材、主体的な日本語の獲得、関係性、編み直し、
クリエイティブ・ラーニング

1. はじめに

本稿は、来日間もない留学生の日本語活動のために作成した日本語教材⁽¹⁾についての報告である。報告を通して、留学生、教師、地域住民のつながりを生み出す日本語教材のあり方を考えてみたい。

近年、日本語教育における「文法積み上げ式」の教育やそれに関連する効率主義、正解主義が批判的に議論されている。例えば、西口(2010)は、従来の基礎日本語教育が、「学習者に日本語の言葉を持たせること(言語事項知識の拡充)」(p.8)への対応が主であった一方で、「持ち合わせた日本語の言葉を言語活動の必要に応じて適正に動員できるようにすること(言語事項の動員力の向上)」(p.8)は、制約された範囲の中で各教師の工夫に任せられており、「この両者の分裂が大きな課題となっていた」(p.11)と述べている。そこで、西口は、従来の基礎日本語教育の課題を克服するために、言語学習と言語活動を一体として捉えた「自己表現活動」を柱としたカリキュラム、教材開発、教室活動の重要性を主張している。また、細川(2017)は、日本語教育が方法・技術主義へと進んでいった背景として、「学習者中心」や「学習者主体」の概念が現れる中で「コミュニケーション能力を向上させて、その次に何かあるのかという問い」(p.62)としての教育目的論の不在や、「教師の持つ正解への問題性」(p.62)に対する議論の不在があったとしている。その上で、細川は、自己・他者・社会をつなぐ理論的な枠組みとして「ことばの市民」という概念を提唱し、自己を発信し、他者との対話・議論を通して、市民性のための社会参加意識を形成する重要性を述べている。

このような西口や細川の主張は、学習者と教師の関係性、効率的な教え方、言語学習と自己表現の分断といった日本語教育における問題性への批判であるが、そこで議論されてきた問題性は、依然として教室活動の現場に残された課題であり、筆者も、特に、こうした教師と学習者の一方的な関係性に問題意識を抱いていた。

本稿は、こうした先行研究の主張を踏まえつつ、教師から一方的に知識を与えるような「教える一教えられる」関係性を越えた、留学生、教師、地域住民のつながりを生み出す日本語教材のあり方を考えてみたい。前掲の西口(2010)によれば、教材は、「カリキュラム(教育の計画や趣旨)を反映しつつ教師による学習経験の編成を支援しようとする資料」(p.12)であり、具体的な学習経験は、「教材と学習者と教室の中の行為者としての教師という3者が絡み合うところで構成される」(p.12)という。そのように考えれば、教材のあり方を問うことが、それを介した学習者と教師のつながりやそこから生まれる学びを問うことにつながるといえるだろう。

2. 作成した日本語教材

本稿で紹介する日本語教材は、2019年4月に、筆者の勤務校の留学生別科に入学した留学生を対象とした夏期休暇中の特別授業で使用するために作成したものである。教材を作成するにあたり、活動の目的を以下のように設定した。

<活動の目的>

1. 留学生活の基盤である大学周辺地域をより深く知り、愛着をもつ。
2. フィールドワークや成果発表に必要な日本語能力を身につける。
3. 学内外およびこれから来日する後輩とのつながりを作る。

(20190621 特別授業実施要項より)

活動の目的として、「地域をより深く知り、愛着をもつ」としたのは、来日したばかりの留学生にとってこれからの大学生活の基盤となる地域を理解することで、安心して生活し、地域住民と知り合うことでその土地に親しみを持ってほしいという期待があったからである。また、地域を知ることが地域住民との共通点を生み出すとともに、その成果がこれから来日する後輩たちにとっても参照可能な資料として残ってい

くことも期待し、留学生にとっての横のつながりや縦のつながりを重視した。そして、以上を踏まえ、日本語教材および教室活動のテーマを『地域の魅力発信ポスター』を作ろう」とした。

また、教材の作成においては、「クリエイティブ・ラーニング」(井庭編 2019)の考え方を参照した。「クリエイティブ・ラーニング」とは、他者とともに生きながら、新たな価値を生み出し、グローバルな世界における問題の解決や幸福(ウェルビーイング)の実現を支える構成主義的学習観に立った教育のあり方である。その学びの特徴は、「つくるなかで学びを深める」(p.12)という「つくる」ことの重視であり、「自分が『つくったもの』から学ぶとともに、『つくる活動』そのものからも学ぶ」(p.13)経験が、参加者の新たな発見や気づき、変化につながるという。このような「クリエイティブ・ラーニング」の考え方は、同じ地域に住む仲間として留学生、教師、地域住民が相互に関わっていくような教室活動を志向する上で示唆的であると考えた。以上の目的と考え方を背景と

して作成した日本語教材(全27ページ)の目次は、表1の通りである。

3. 実践報告

3.1 実践の概要

まず、実践の概要について説明する。本実践は、2019年4月に、筆者の勤務校の留学生別科に入学した留学生を対象に実施したものである。授業参加者は、26名であり、全員がアジア(非漢字圏)の同じ国からの留学生であった。実践の期間は、2019年7月29日～8月26日までの約1か月間で、30コマ(1コマ90分)の活動を実施した。実践には、筆者を含め8名の教師が関わった⁽²⁾。活動では、26名の学生を13名ずつ2クラスに分け、2クラスとも同様の内容を実施した。このようにした理由は、なるべく少人数のクラスで学生同士や学生と教師のきめ細かなやりとりを期待したからである。実践の大まかなスケジュールと内容、教材の各課との対応は表2の通りである。

表1 教材の目次

課	課のタイトル	ページ数
1	はじめましょう	p.1~2
2	〇〇(※学生の国)の町はどんな町?	p.3~5
3	下関はどんな町?	p.6~9
4	リサーチテーマを決めよう	p.10~11
5	インタビュー計画を立てよう	p.12~13
6	インタビュー会話	p.14~15
7	フィールドワークへ行こう	p.16~19
8	フィールドワークはどうだった?	p.20
9	ポスターを作ろう	p.21~22
10	ポスター発表	p.23~24
11	おわりましょう	p.25~26
巻末	テキストのことは	p.27

表2 授業計画

月日・時限	内容	教材との対応
7月29日 1	①オリエンテーション ・活動目的、内容、計画、ゴールについて ・チーム決め ②母国の町紹介 ・母国の町の魅力や良さについてまとめる	「1課 はじめましょう」 「2課 ○○（※学生の国）の町はどんな町？」
7月29日 2	②母国の町紹介 ・前時の活動を引き続き行う（完成） ・グループ毎に発表する	「2課 ○○（※学生の国）の町はどんな町？」
7月30日 1	③大学周辺および下関の地理とランドマーク ・大学周辺および下関の地図を参考に、どのような特徴的な建物、店、公共施設があるかを調べ、まとめる	「3課 下関の町はどんな町？」
7月30日 2	③大学周辺および下関の地理とランドマーク ・下関に関するいくつかのトピックについてグループで調べ、まとめる。（下関の名産、名所、有名人、日本……等）	「3課 下関の町はどんな町？」
7月31日 1	④リサーチテーマ ・これまでまとめた資料を参考に、グループでリサーチテーマを決める	「4課 リサーチテーマを決めよう」
7月31日 2	⑤リサーチ計画 ・前時の内容をもとに詳細な計画を立てる ・インタビュー項目を設定する	「5課 インタビュー計画を立てよう」
8月1日 1、2	⑤リサーチ計画 ・前時の活動を引き続き行う（完成）	「5課 インタビュー計画を立てよう」
8月2日 1、2	⑥インタビュー練習 ・インタビュー練習 ・リサーチ計画を参考にインタビュー会話を作成し、練習する	「6課 インタビュー会話」
8月5日 1、2	⑦フィールドワーク ・ショッピングモールにてインタビュー活動	「7課 フィールドワークへ行こう」
8月5日 3、4	⑧振り返り ・調査で知った表現の共有する ・感想を共有する ・ポスター作成の説明	「8課 フィールドワークはどうだった？」 「9課 ポスターを作ろう」
8月6日 1、2	⑨ポスター作成と発表原稿作り ・ポスター作成 ・発表原稿作り（執筆と修正）	「9課 ポスターを作ろう」
8月7日 1、2	⑨ポスター作成と発表原稿作り ・ポスター作成 ・発表原稿作り（執筆と修正）	「9課 ポスターを作ろう」
8月19日 1、2	⑨ポスター作成と発表原稿作り ・ポスター作成 ・発表原稿作り（執筆と修正）	「9課 ポスターを作ろう」
8月20日 1、2	⑨ポスター作成と発表原稿作り ・ポスター作成 ・発表原稿作り（執筆と修正）	「9課 ポスターを作ろう」
8月21日 1、2	⑨ポスター作成と発表原稿作り ・ポスター作成 ・発表原稿作り（執筆と修正）	「9課 ポスターを作ろう」
8月22日 1、2	⑩発表練習 ・ポスター発表の仕方（良い発表とは何か） ・発表練習	「10課 ポスター発表」
8月23日 1	⑩発表練習 ・発表練習	
8月23日 2	⑪リハーサル	
8月26日 1	⑫成果発表会 ・調査で分かった「地域の魅力」を発表する	
8月26日 2	⑬振り返り ・活動を通して学んだこと	「11課 おわりましょう」

3.2 分析の結果

ここからは、作成した日本語教材を用いて行った実践について、留学生、教師、地域住民の関係性の変化が見られた場面をいくつか取り上げ、その様子を紹介したい。本稿では、分析のデータとして各授業の終わりに担当教師が記した観察記録、学生による成果物、活動を記録した画像記録、特別授業の最後に学生が書いた振り返りの記録を用いた。ここでは、紙幅の関係上、主に学生Bの振り返りを中心に紹介したい。なお、それぞれの場面に関連する教材の箇所については、巻末資料を参照してもらいたい。

① 教師が学生に教えてもらう活動：「母国紹介」(巻末資料①)

本教材のメイン活動は、「地域の魅力」を見つけるというものであるが、その前段階として、2つのサブ活動を配置した。これらの活動は、その後のメイン活動につながるものである。1つは、「母国紹介」であり、もう1つは、「下関の名物調べ」である。これらの活動の目的は、地域の魅力となるような特徴を紹介する際の観点を理解すること、そして、下関の町の地理や歴史、観光について大まかな全体像をつかむことであった。しかし、実際に教材を使用してみると、筆者が想定した目的以外の効果も見られた。

それは、学生と教師の関係性の変化であった。学生たちは、日本に来たばかりということもあり、日本語の学習においても日本での生活においても、教師から知識を与えられることがほとんどであった。しかし、この活動では、学生の母国の町について、その町を知らない教師に情報を伝えることで、いつもは教える立場にある教師が学生から教えてもらう立場になったのである。つまり、「母国紹介」の活動を通して、瞬間的ではあるが、学生と教師の新たな関係性が生まれたのである。

② 興味のあるテーマを持って地域に出かける：「調査計画とフィールドワーク」

(巻末資料②)

活動の目的である「地域の魅力」を見つけるために、本教材では、リサーチテーマに基づいたフィールドワークを組み込んだ。リサーチテーマを決めることは、各チームが自分たちで学びの課題を設定することであり、学生が自らの問題意識を持って主体的に取り組んでいくためのタスクであったといえる。通常の日本語授業では、学生たちは文法項目や語彙などの教師が準備した学習内容を受け取ることがほとんどであるが、この教材では学生自らが学ぶ項目を設定できるようにした。また、学生の問題意識が明確になるように学生自身の興味関心や生活での課題とリサーチテーマとの結びつきを言語化するタスクを加えた。

①で示したように、ここまでの準備段階として2つのサブ活動があったが、やはり、学生にとっては、このリサーチテーマの設定や、この後に続くインタビュー計画のタスクで苦勞する様子が見られた。しかし、そのような状況に対して、担当教師の一人であるA先生の行動が学生を後押しするきっかけとなった。A先生は、持参した「旅行雑誌」を学生と一緒に見ながら観光地を探すという活動を行ったのである。その時の学生の様子について、A先生は次のように記している。

1限目ではあまり積極性が見られず、ちょっと心配してましたが、旅行雑誌をみんなで見て、色々ディスカッションすると、場の雰囲気もよくなり、目的であるインタビューの質問項目を提示するところまでたどり着きました。(20190801 A先生観察記録 より)

実は、今回の実践に参加した8名の教師の内、4名は下関に移り住んだばかり、または、ほとんど馴染みのない教師であった。A先生もその一人であった。そのような背景もあり、A先生は「旅行雑誌」を持参し、学生とともに雑誌を見ながらリサーチテーマ、調査計画、インタビュー内容、を作成する手助けをしたのである。この働きかけによってディスカッションが進み、「場の雰囲気」が良くなったということ

を考えると、こうした関わりも①の「母国紹介」と同様、学生と教師の関係性を変化させる工夫として働いていたように思える。ここでの教師の立場は、学生とともに考える相手としての立場であった。このようにして、各チームは、無事それぞれのテーマを持つことができた。ある学生は、振り返り記録の中で以下のように記している。

チームは一つべつべつです。問題もべつべつです。チームごとは問題を研究しました。そしていっしょにそうだんしました。意見を交換するように一番いいの意見をさがしました。
(学生B 振り返り記録より)

学生Bは、「チームは一つべつべつです。問題もべつべつです。」と記している。これは、各チームがそれぞれ異なる「問題」(テーマ)を扱ったということを示していると思われるが、通常の授業の中では聞かれない学生の感想ではないだろうか。なぜなら、通常の授業では、教師が定めたシラバスに沿って、みんなが同じ項目を学んでいるからである。しかし、本実践では、教材のいくつかのタスクを経て、次第にチームごとの学習項目へと分岐していったということが窺える。それが、「問題もべつべつ」という結果につながったのではないだろうか。

さて、こうして学生たちはフィールドワークへと出かけていった。フィールドワークは、大学から自転車で15分ほどのところにある大型商業施設で行った。今回の特別授業が始まる前に筆者が施設の支配人に依頼文を送り、趣旨説明や日程調整などを重ね、インタビュー活動の許可を得ることができた。インタビューは、開店直後から1時間30分程度行った。このフィールドワークの中で最も印象的だった出来事は、ある地域住民の方々との出会いであった。

その出会いは、1組のチームが商業施設の休憩スペースで休まっていた方々にインタビューを申し込んだことがきっかけで生まれたのだが、そこへいくつかのチームも合流し、引率で来ていた筆者らもその輪に加わり、小さな交流

会のような状況となった。学生たちは、自分たちが準備した質問を聞きながら地域の方からも質問を受けたり、そこから発展した話題(母国の紹介や大学での日本語の勉強についてなど)で盛り上がりたりした。また、地域の方は、学生とのやりとりを通して「元気をもらった」と言ってくださり、筆者と連絡先を交換し、活動の最終日に行われた発表会にも参加してくれたのである。この偶然生まれた留学生と地域住民との交流は、筆者らが当初想定した「インタビュー」という形式的なやりとりを大きく超えて、自由でお互いが話したい気持ちを持った笑顔溢れる時間となった。

学生は、このようなフィールドワークを通して何を感じたのだろうか。学生は、フィールドワークについて以下のような感想を記している。

8月5日に△△(※ショッピングモール)でインタビューしました。ここで私たちは日本人と会って話しました。そのおかげで、私の日本語が上手になりました。

(学生C 振り返り記録 より)
インタビューのなかに、私たちは日本人にあった。そしていっしょにたくさんおしゃべりしました。

(学生B 振り返り記録 より)

もちろん、全てのインタビューが成功したわけではない。インタビューを申し込んでも断られたり、相手の話している内容がうまく聞き取れなかったりと苦い経験をした学生もいたようである。しかし、その一方で、学生Cのように、「日本語が上手になりました」と実感したり、学生Bのように「いっしょにたくさんおしゃべりしました」と達成感を持ったりした学生も多かった。「日本語が上手になった」という感想は学生の主観によるものだが、それは、この学生が伝えたいことや知りたいことが相手へと伝わり、相手にもそれを受け止めてもらえたという、やりとりの成功体験を示しているのではないだろうか。地域の方が「元気をもらった」と

話してくれたことも学生自身の興味関心の思いや熱意が相手に伝わったということを示しているだろう。

③ 作りながら、ともに地域について考える：「ポスター制作」(巻末資料③)

教材の後半では、チームで集めてきた生の声を材料に、地域の魅力を伝えるポスターを作るという活動を配置した。ポスターを作る段階では、学生たちはどのように学んでいたのだろうか。

ポスターをデザインするのはチームいっしょにそうでした。一番いいの意見はポスターを書くことにえらびました。ポスターの題名について先生と友達に相談しました。先生は私たちにてつだってくれましたから、私たちはすばらしい題名をえらびました。
(学生B 振り返り記録 より)

学生Bは、ポスターを作る段階でチームの仲間と相談し、「すばらしい題名」を選ぶことができたこと記している。この場面では、チームの仲間だけでなく、教師も一緒になってタイトルを考えている様子も見える。ここでも、教師は知識を与えるという役割ではなく、相談相手に近い存在として学生に関わっていたといえるだろう。学生たちは、チームの仲間や教師とともに

ポスターを作りながら、意見を交換し合い、「地域の魅力」を見出していったのである。こうして作ったポスターの一部を紹介する(図1～3)。この後、学生はこのポスターを用いて

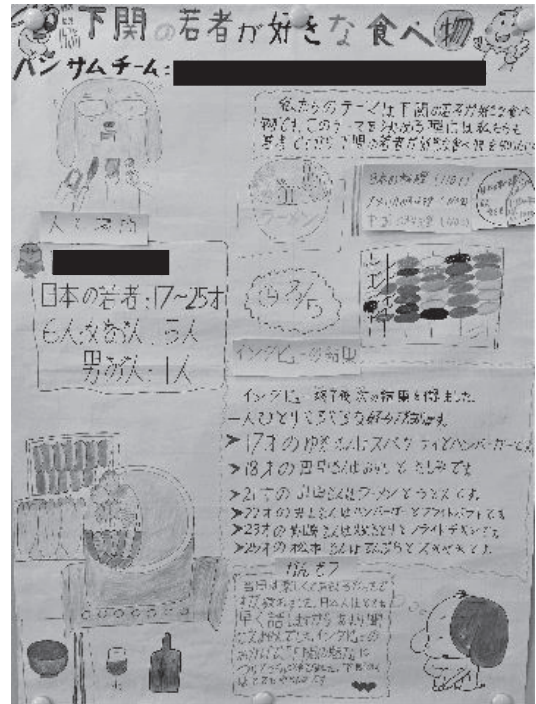


図2 ポスター

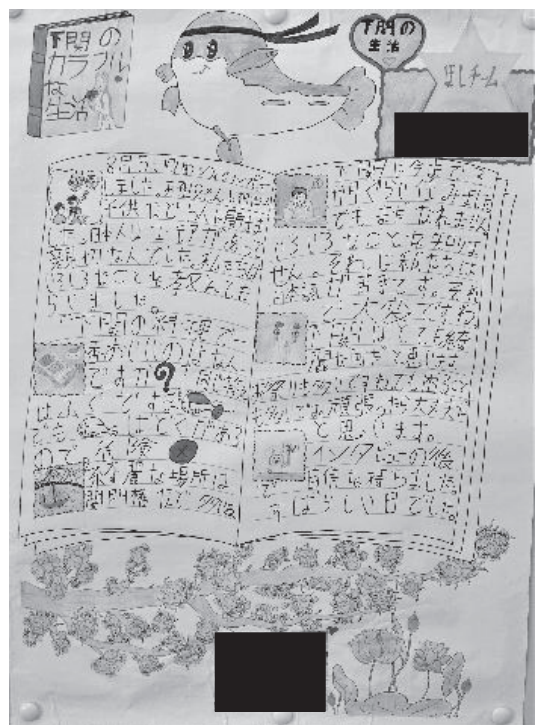


図3 ポスター

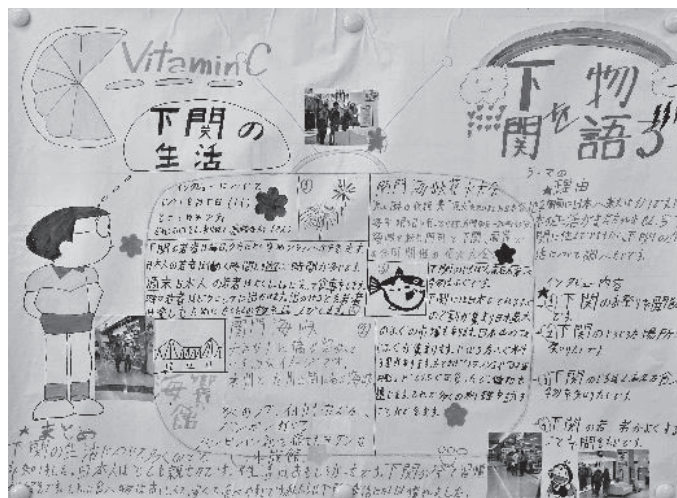


図1 ポスター

最終発表会に臨んだ。発表会にはフィールドワークで出会った地域住民の方や学内の多くの教師が参加してくれた。

4. 考察

第3章の分析の結果を踏まえ、留学生、教師、地域住民をつなぐ日本語教材のあり方について考えてみたい。

4.1 主体的な日本語の獲得を引き出すしかけ

まず、本教材を用いた実践において印象的だったのは、活動を通じて多くの学生が日本語能力の向上を実感していたという点である。それはなぜか。分析の結果からは、学生がチームの仲間や教師、地域住民とのことばのやりとりを通して、テーマを明確にしたり深めたりしている様子が見られたが、それらが学生自身の日本語能力に対する主観的な意識へと影響を与え、自信や達成感へと結びついたといえる。これは、学生が伝えたいと思ったことが伝わった達成感や、知りたいと思ったことが分かった達成感であり、学生の主体的な日本語の獲得⁽³⁾の様子を示している。

では、このような留学生の学びを支えていたのは何か。それは、学生自身が学びをデザインする主体としての意識を持てるようないくつかの教材のしかけであると考えられる。例えば、「リサーチテーマ」の設定である。このタスクでは、教師から知識を受け取るのではなく、学生自らが考え、計画し、学生自身が必要な日本語の表現を使うというオーダーメイドの学習が可能になった。

このような教材と学習者の主体的な関わりについて、「学習材」(門倉 2018)の考え方が参考になる。門倉(2018)は、「多読教育」で読まれる「本」について、教師から学習者に知識を伝えるための材料(「教材」)ではなく、学習者自身が興味を持ち、自ら選び、取り組むという学習者主体の視点(「学習材」)で捉えるべきであると主張している。本実践における日本語教材も、教師が知識を与えるための材料ではなく、学生のテーマを引き出し、言語活動の原動

力となるような「学習材」としての働きをしていたといえないだろうか。そして、この主体的な日本語の獲得が、留学生、教師、地域住民のつながりを考える上で重要な意味を持っていた。

4.2 主体的な日本語の獲得と留学生と教師の関係性の変化

以上のような学生の主体的な日本語の獲得は、学生自身が学びをデザインする余地を残した教材の工夫から生まれたものであるが、さらに、留学生と教師の関係性の変化を生み出す教材の工夫も大きな意味を持っていたといえる。例えば、「母国紹介」の場面やポスターを作りながら学生と教師がともに相談し合う場面がその例である。本実践に関わったA先生が「旅行雑誌」を持参し、学生とともに地域について理解を深めようとした場面も学生と教師の関係性が変化した場面であったといえる。

本教材を作成する上で参考とした「クリエイティブ・ラーニング」(井庭編 2019)においても、教師は「ジェネレーター」(generator)としての役割を担うという。それは、「生徒・学生と同じ側に立ち、ともに考え、自分も実際に手を動かすことで、一緒に作っていく」(p.17)存在である。本実践において教材のタスクが、教師と学生がともに考えたり、教え合ったりするという固定的ではない動的な関係性を生み出すしかけとして機能していたと考えられる。その意味において、本実践における教師の役割も「ジェネレーター」としての性格を持っていたのではないだろうか。通常の授業では、教師と学生の関係性は「教える-教えられる」関係であったが、本実践では、瞬間的であったとしてもその関係性が解体され、そこに新たなつながりが生まれ、そのつながりの変化も学生の主体的な日本語の獲得を推し進めることにつながっていった。またその逆に、学生が主体的に日本語を獲得することで教師の新たな関わり方(例えば、教える者→相談相手)を引き出したという様子もあり、両者は相互の影響があったといえる。

4.3 留学生と地域住民の関係性の編み直し

主体的な日本語の獲得と関係性の変化の相互の影響は、フィールドワークでの地域住民との出会いにおいても見られた。それは、学生からのインタビューという活動の枠組みを超えて、それぞれの個人的な興味関心に基づいたやりとりに発展し、さらには、学生とのやりとりを通して地域住民が発表会に参加するという次の行動へとつながったという点である。このような関わり合いは、日本人が外国人を受け入れるといった一方的な関係性ではなく、学生の活動に関心を持ち、学生も地域住民もともに関係を構築していくような関わりが窺えた瞬間であったといえる。このような学生と地域住民のつながりが生まれたのは、学生の主体的な関わりが地域住民の興味や関心とつながり、相互の関わりを引き出したからである。

また、このような様子は、本実践終了後の10月に行われた大学祭においても見られた。大学祭では、ポスターを再掲示し、訪れた地域住民や学生、教師を前に発表をした。そこでは、ポスターに書かれた内容をきっかけに話し手である学生と聞き手との間で様々な話題が生まれ、そこに新たな関係性が生まれる様子が見られた。それは、「自分が『つくったもの』から学ぶ」(井庭編 2019:13)という経験であったといえる。本教材の「つくる」という活動が、留学生、教師、地域住民の関係性に様々な角度から変化をもたらしていたということが考えられる。

留学生と地域のつながりを考えるとき、どうしても「教える—教えられる」といった関係性を自明のものとして捉えがちである(「地域の文化を教えてもらう」「地域のルールを教えてもらう」など)。もちろん、地域社会に参加する上でそのような活動は必要である。しかし、

そのような関係性を固定的に捉えるのではなく、本実践で偶然に生まれた地域住民との交流会のような心から相互に関心を持ち合う関わりを生み出す工夫も必要ではないだろうか。佐伯(2014)は、「人がかかわる」ということについて、「本当に『かかわる』ということは『二人称的にかかわること』」(p.48)だと述べている⁽⁴⁾。学ぶことは、相手を一方的な観察の対象として捉えるような関係ではなく、相互に楽しみ合うような関係の中で生まれるのである。そのように考えれば、本実践において、留学生、教師、地域住民が二人称的に関わり、ともに心から楽しもうとする場面が生まれていたといえるのではないだろうか。

5. おわりに

本稿では、来日間もない留学生の日本語活動のために作成した日本語教材とその教材を用いた実践を巡って、留学生、教師、地域住民のつながりを生み出す日本語教材のあり方を考えた。その結果、教材における留学生の主体的な日本語の獲得を支えるしかけと、留学生と教師、地域住民の動態的な関係性をもたらすしかけが留学生と教師、留学生と地域住民のそれまでの一方的な関係性(「教える—教えられる」, 「受け入れる—受け入れられる」)を一旦解体し、編み直し、新たな関係性を構築するという意味での「つながり」を生み出していたことが分かった。今後も外国人住民の増加に伴う地域の多様化が急速に進むことが予想されるが、本実践は、外国人にとっても日本人にとっても地域でともに生活する仲間としての意識を生み出す多文化共生教育を考えるきっかけとなるのではないだろうか。

〔注〕

(1) 本稿で報告する日本語教材は、筆者がコンセプト、内容、構成および教材を使用した主な活動を構想し、ともに活動を実施した他の教師からの意見を踏まえ、作成したオ

リジナル教材である。

(2) 本実践に参加した8名の教師の内、専任講師は4名、非常勤講師は4名であった。実践の柱となるカリキュラム、シラバスは筆

者が作成し、他の教師と内容を共有した上で実践を進めた。実践の過程で各回の担当者からの気づきやアドバイスを聞きながら、内容を調整していった。

- (3) 本稿では、教科書や教師から知識を教わり、習うという意味ではなく、留学生が自らテーマを選び、そのテーマに基づいて自分が伝えたい内容を伝えるためのことばを学び、使用するという意味として「獲得」を用いている。
- (4) 佐伯（2014）は、二人称的かかわりについて、「①対象を情動的存在（よろこんだり、笑ったり、悲しんだり、怒ったりする存在）とみなす（いわゆる『知的』側面だけを見るのではなく、情感あふれる姿を見る）。②対象はかかわる人のかかわりに『応える』存在（つまり、こちらのかかわり方次第で、まったく違った反応を示す存在）とみなす。③対象は基本的にたのしい、うれしい、面白い、『応答的關係』を求めている存在とみなす」と説明している。

参考文献

- 井庭崇編（2019）『クリエイティブ・ラーニング創造社会の学びと教育』慶應義塾大学出版会
- 門倉正美（2018）「リーディング・ワークショップで多読する—アカデミック・ジャパニーズにおける多読のすすめ—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10, pp.1-17.
- 佐伯胖（2014）「そもそも『学ぶ』とはどういうことか：正統的周辺参加論の前と後」『組織科学』48（2）, pp.38-49.
- 西口光一（2010）「自己表現活動中心の基礎日本語教育：カリキュラム，教材，授業」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』14, pp.7-20.
- 細川英雄（2017）「学習者主体からことばの市民へ ポリティクスとしての言語文化教育の歴史と革新」『言語文化教育研究』15, pp.58-66.

2

母国の町はどんな町？

月 日

まず、みなさんの町について考えましょう。みなさんの母国の町は、どんな町ですか？どんなきれいな場所やおもしろい場所がありますか？町の人はどうな人ですか？みなさんの町を知らない人に教えてください。

➤ 町の紹介

1. 良い町の紹介は、どんな紹介でしょうか？

- ・町の「おすすめ」が分かる紹介。
- ・町の歴史や自然が分かる紹介。
- ・
- ・

2. 町の紹介をする時に使ういろいろな日本語

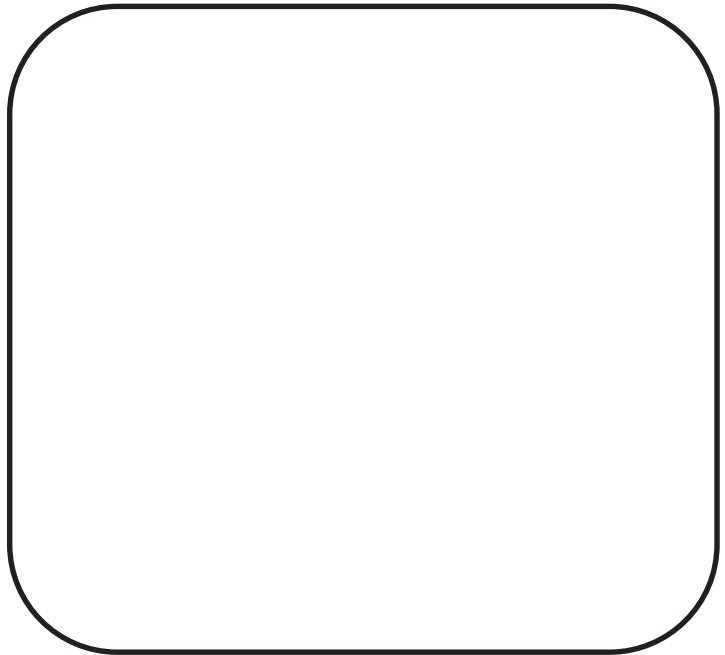
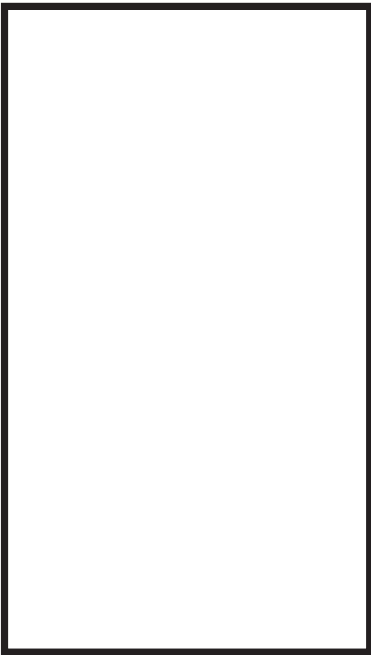
- ・～に…があります。 ～に…がいます。
- ・町の西側に海があります。 ・町に外国人がたくさんいます。
- ・～は…が（形容詞）です。
- ・この町は自然がきれいです。 ・この町は「〇〇祭り」が有名です。

- ・～で一番（形容詞）です。
- ・この町は、～で一番大きな町です。

・便利な言葉

東（ ） 西（ ） 南（ ） 北（ ） ～側（ ）
中心（ ） 人口（ ） 名物（ ） 名産（ ）
名所（ ）

➤ 町の名前： _____



1. はじめ

これから、〇〇（※学生の母国）の _____ について発表します。

2. 基本情報（どんな町？）

_____ は、_____ 町です。

3. おすすめの場所や食べ物、きれいな自然など①

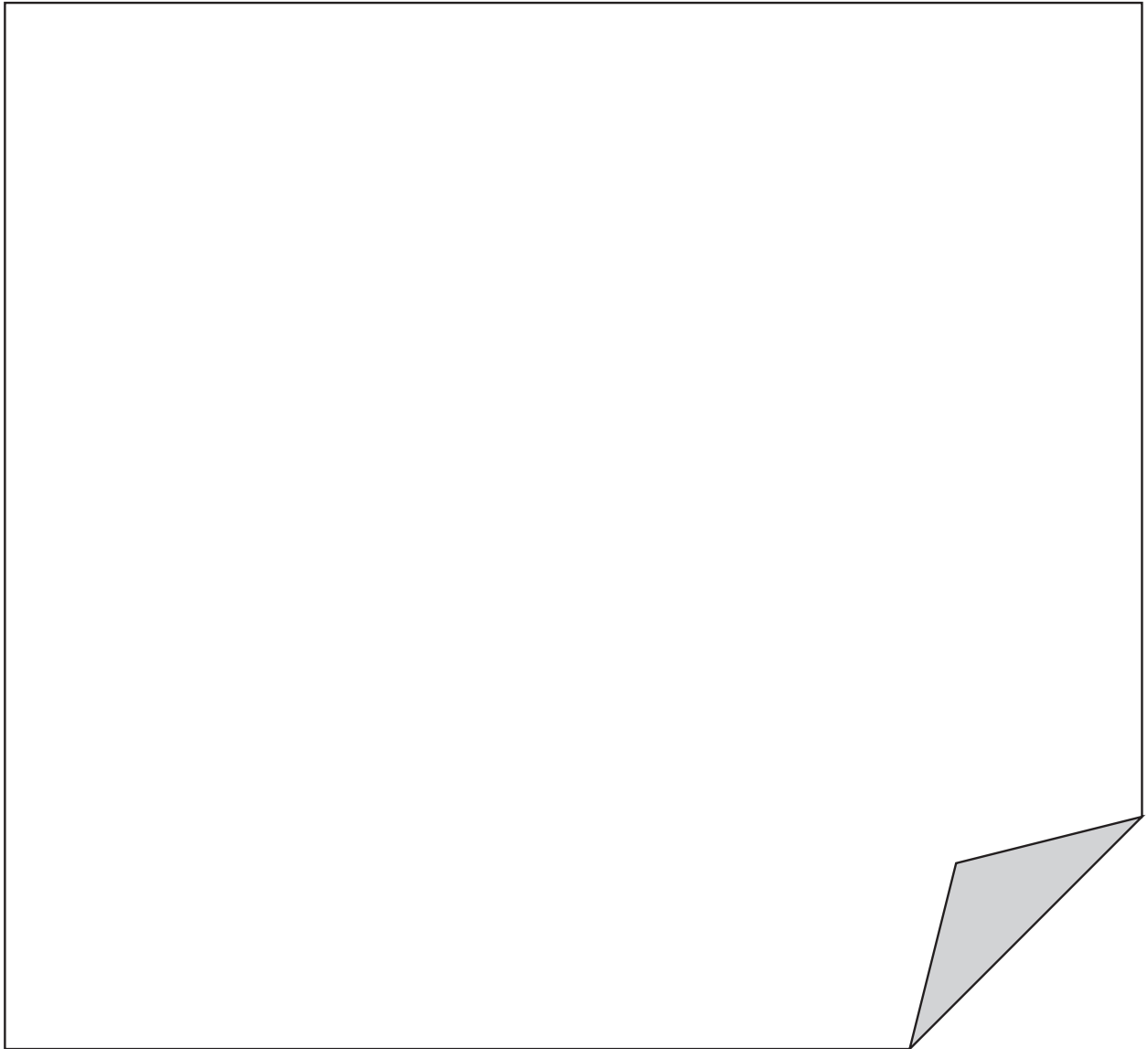
4. おすすめの場所や食べ物、きれいな自然など②

5. おわり

これで、〇〇（※学生の母国）の _____ について発表を終わります。

➤ 「町の^{しょうかい}紹介」の発表を聞く

1. 他のチームの発表を聞いて、メモを書こう（どんな発表でしたか？）



2. まとめ

「町の^{しょうかい}紹介」をするとき、どんなことを^{しら}調べると、おもしろい^{しょうかい}紹介になるでしょうか。

4

リサーチテーマを決めよう

月 日

下関についていろいろ分かりましたね。下関が少し好きになりましたか？しかし、下関の人に聞くと、もっと下関について知ることができるでしょう。さあ、いよいよ、インタビューの計画を立てましょう。どんなテーマでインタビューがしたいですか？

➤ 「リサーチテーマ」 (例)

1. リサーチテーマ 「 _____ 」

調べたいテーマを書きます。例えば、「～について」を使います。

2. 理由

なぜ、そのテーマを考えましたか？そのテーマについて知ると、
どんないいことがありますか？

3. リサーチ内容

何を調べますか？下関を知らない人、後輩や先生、家族がうれしい
内容を考えましょう。

4. インタビュー内容

3の内容を知るために、どんな人に、どんな何を聞きますか？

1. リサーチテーマ 「 _____ 」

2. ^{りゆう}理由

3. ^{ないよう}リサーチ内容

4. ^{ないよう}インタビュー内容

9

ポスターを作ろう

月 日

インタビューの結果^{けつが}を使って、「下関^{かみよ}の魅力^{みりょく}発信^{はつしん}ポスター」を作しましょう。ポスターを作ると、みなさんが調べ^{しら}たことや、みなさんが考^{かんが}えたことをたくさんの人に知^しってもらうことができます。おもしろいアイデアを出して、楽しいポスターを作ってください！

➤ ポスターの作り方

1. 大切な3つのルール

- ① **3秒**^{びよう}で、ポスターのテーマが分かる！
- ② **30秒**^{びよう}で、ポスターの言^いいたいことが分かる！
- ③ **3分**で、ポスターの内容^{ないよう}が全^{すべ}て分かる！



2. ポスターを作る時の注意^{ちゅうい}

- ① 「分かりやすいポスター」、「読^よみたいポスター」を作しましょう。

きれいな字、正^{ただ}しい字、見やすい色、写真やイラスト、字の大きさ・・・などに気をつけよう。

- ② ポスターのタイトルは、チームが考^{かんが}える「下関^{かみよ}の魅力^{みりょく}」を書きましょう。

- ② ポスターは、「たて」でも、「よこ」でも大^{だい}丈夫^{じょうぶ}です。

- ③ チームで仕事を決めましょう。

字がきれいな人、絵^えが上手な人、日本語の作文がとくいな人・・・自分の仕事をしよう。